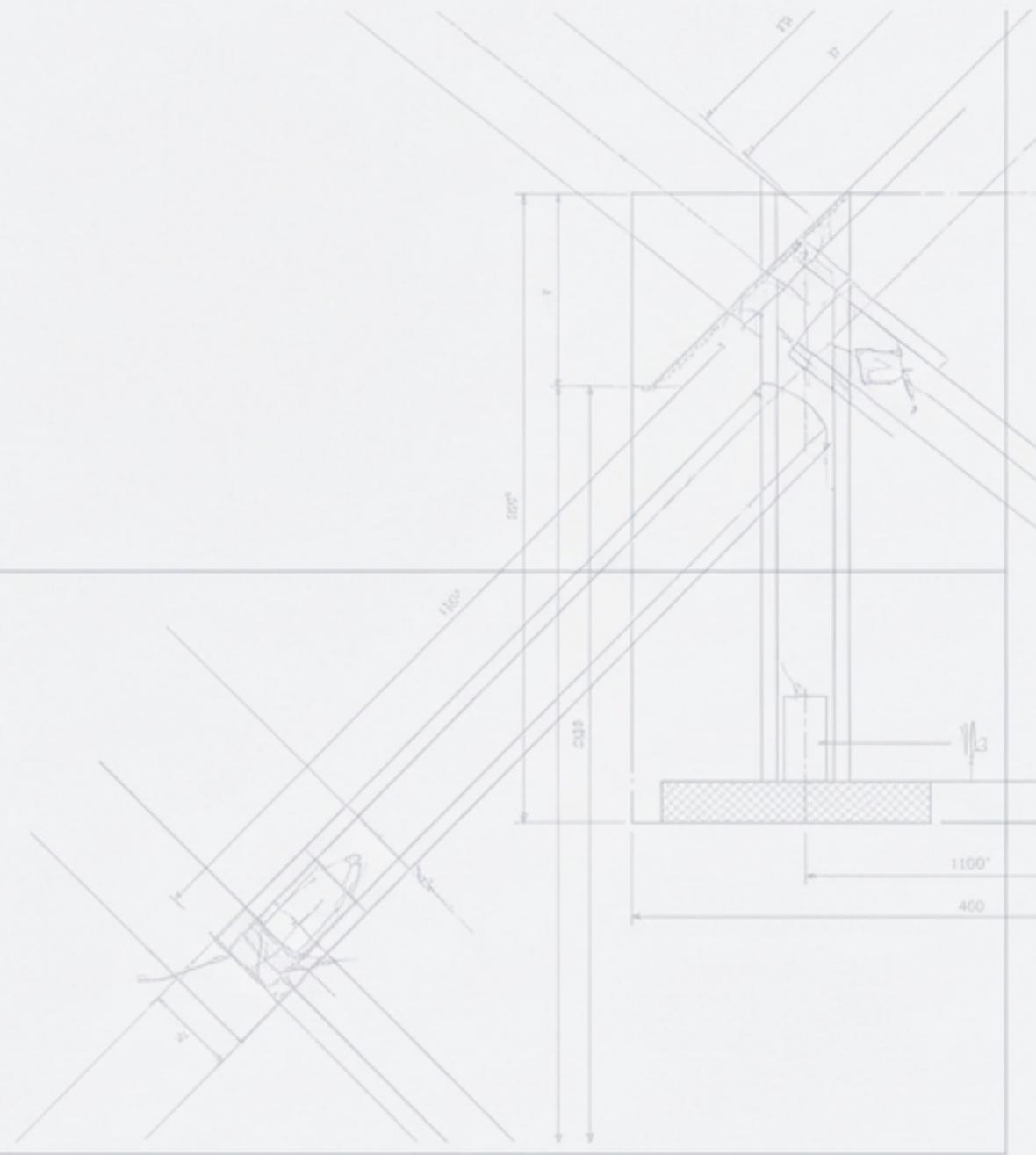
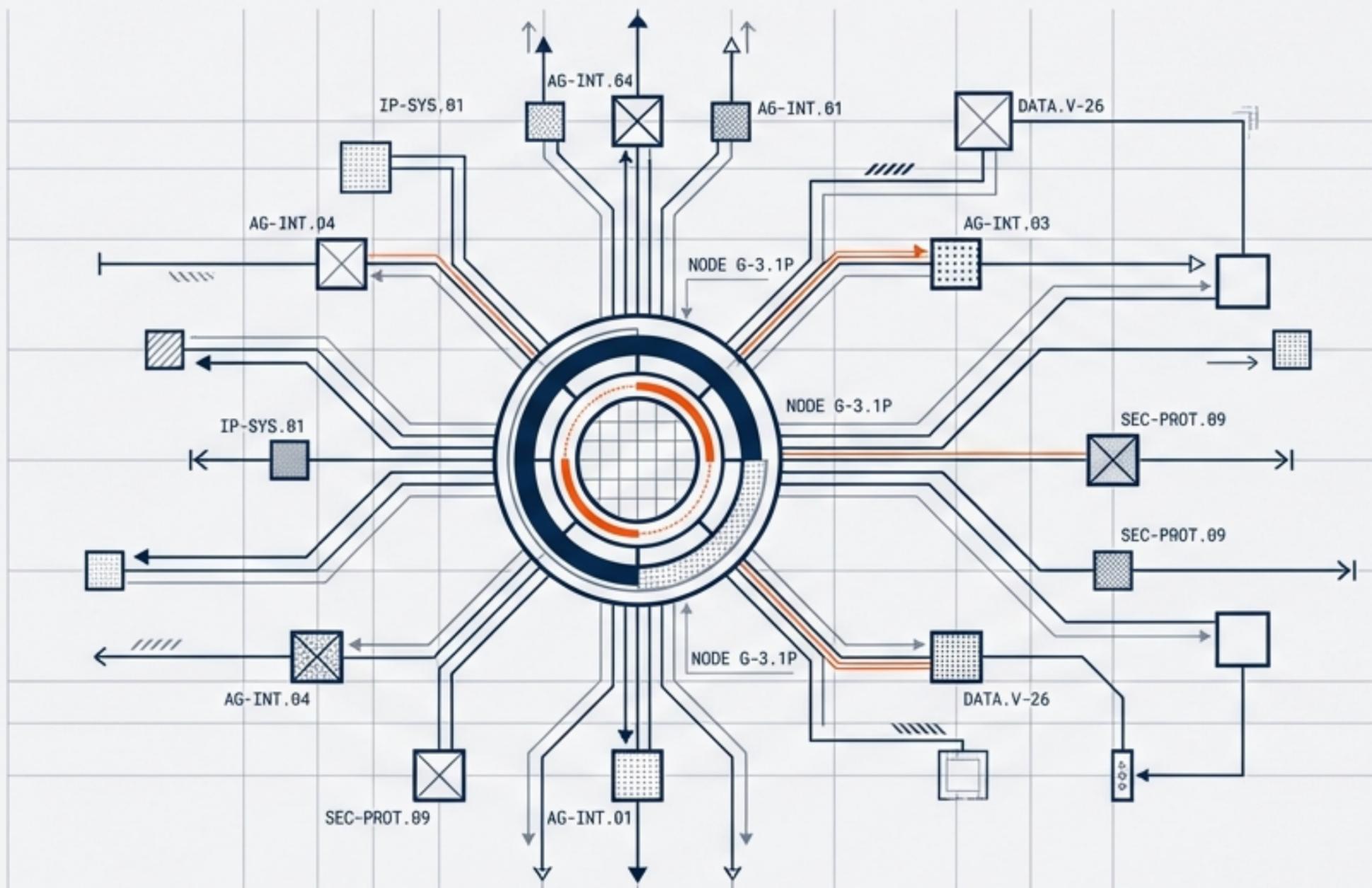


Gemini 3.1 Pro: 企業の知財業務を変革する「エージェント型」新機能

2026-02-19版 アップデート解説と実務実装へのロードマップ



エグゼクティブサマリー：単なる「スペック向上」ではなく「実務の自動化」へ



Context (現状)

Gemini 3 Pro (2025/11) は長文理解に優れるが、複雑な知財ワークフロー（多段推論・ツール連携）では安定性に課題があった。

コストと速度のバランス調整が難しく、全件精査への適用が困難だった。



The Shift (3.1 Proの革新)

推論の制御 (Thinking Level): `medium` の追加により、大量案件のスクリーニングが現実的。

ツール連携 (Custom Tools): 社内特許DBやIPMSを「確実に」参照させる専用モードが登場。

エージェント性能: 検索・閲覧・長期タスクの完遂能力が大幅向上 (BrowseComp, MCP Atlas)。



Action (推奨アクション)

検証: 「本番一括置換」ではなく、契約レビューや発明抽出などのパイロットから開始。

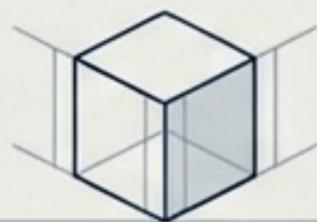
統制: プレビュー版の特性（廃止リスク）を理解し、ZDR（データ保持ゼロ）設計のもとで並走運用を行う。

3 Pro vs 3.1 Pro：差分は「トークン単価」ではなく「制御と連携」にある

項目	Gemini 3 Pro	Gemini 3.1 Pro	知財業務へのインパクト
思考深度	Low / High	Low / Medium / High	スクリーニング (Medium) と精査 (High) の使い分けが可能に
ツール連携	標準のみ	専用ID (...-customtools)	社内特許DB/規定集を優先的に参照し、幻覚を抑制
エージェント性能	標準的	大幅向上 (MCP Atlas +15pt)	「調査→対比→ドラフト」のような多段タスクが破綻しにくい
基礎スペック	1M入力 / 64k出力	同等	長文 (明細書・引例) の一括読み込み能力は維持
知識カットオフ	2025年1月	2025年1月	最新情報は検索グラウンディング等が必須 (変化なし)

コストやコンテキスト長に変化はない。3.1 Proの価値は「長い・複雑・多段」の仕事を実際に完遂させる能力にある。

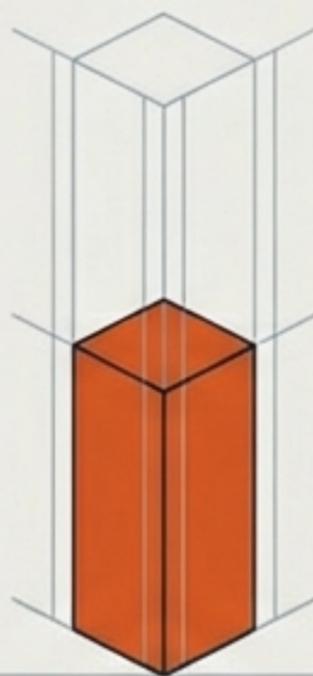
新機能 `thinking_level: medium` がもたらす「コストと精度の最適解」



Low

Fast / Cheap

単純な分類、書誌情報の抽出。



Medium (New)

Balanced Logic

先行技術の一次スクリーニング、
発明発掘（マイニング）、
ポートフォリオ棚卸し。



High

Deep / Expensive

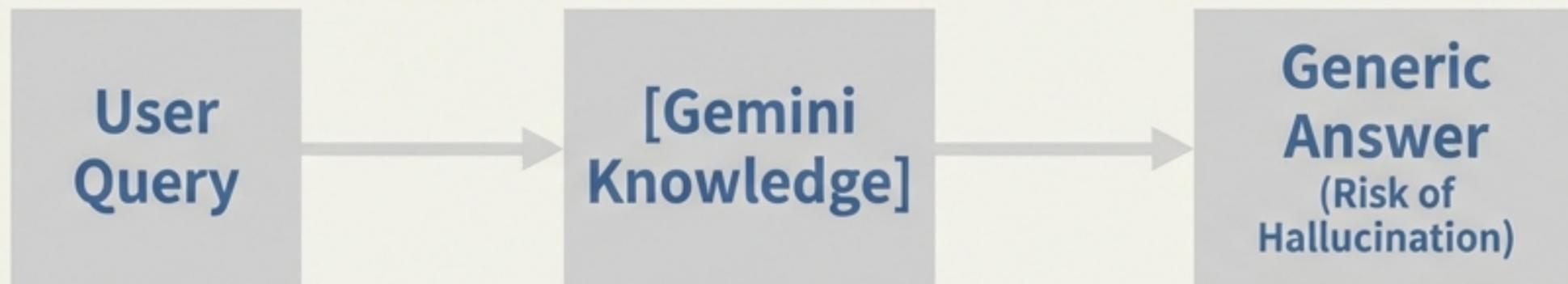
クレームチャート作成、OA応答の
論理構築、無効資料の最終特定。



従来は「Highで全件処理（コスト爆発）」か「Lowで精度不足」の二択だった。Mediumにより、数千件規模の特許分析が現実的なコストで実装可能になる。

`...-customtools` : 社内データを「正」とする運用

Standard Model



Custom Tools Model (3.1 Pro)



強制的な参照:

知財業務では、一般知識よりも「自社の過去の出願」や「契約書リポジトリ」の事実が優先される。

API連携: `Function calling` の精度向上と専用モデルIDの組み合わせにより、社内検索APIやIPMSへのクエリ生成ミスを低減。

ベンチマークが示す「知財エージェント」としての適性

BrowseComp (検索+閲覧)

3.0: 59.2%

3.1: 85.9%

+26.7pt

Web上の非特許文献や競合製品情報を、根拠付きで収集・整理する能力。

MCP Atlas (多段ワークフロー)

3.0: 54.1%

3.1: 69.2%

+15.1pt

「抽出→整形→システム投入」といった複雑な手順をエラーなく実行する能力。

APEX-Agents (長期タスク)

3.0: 18.4%

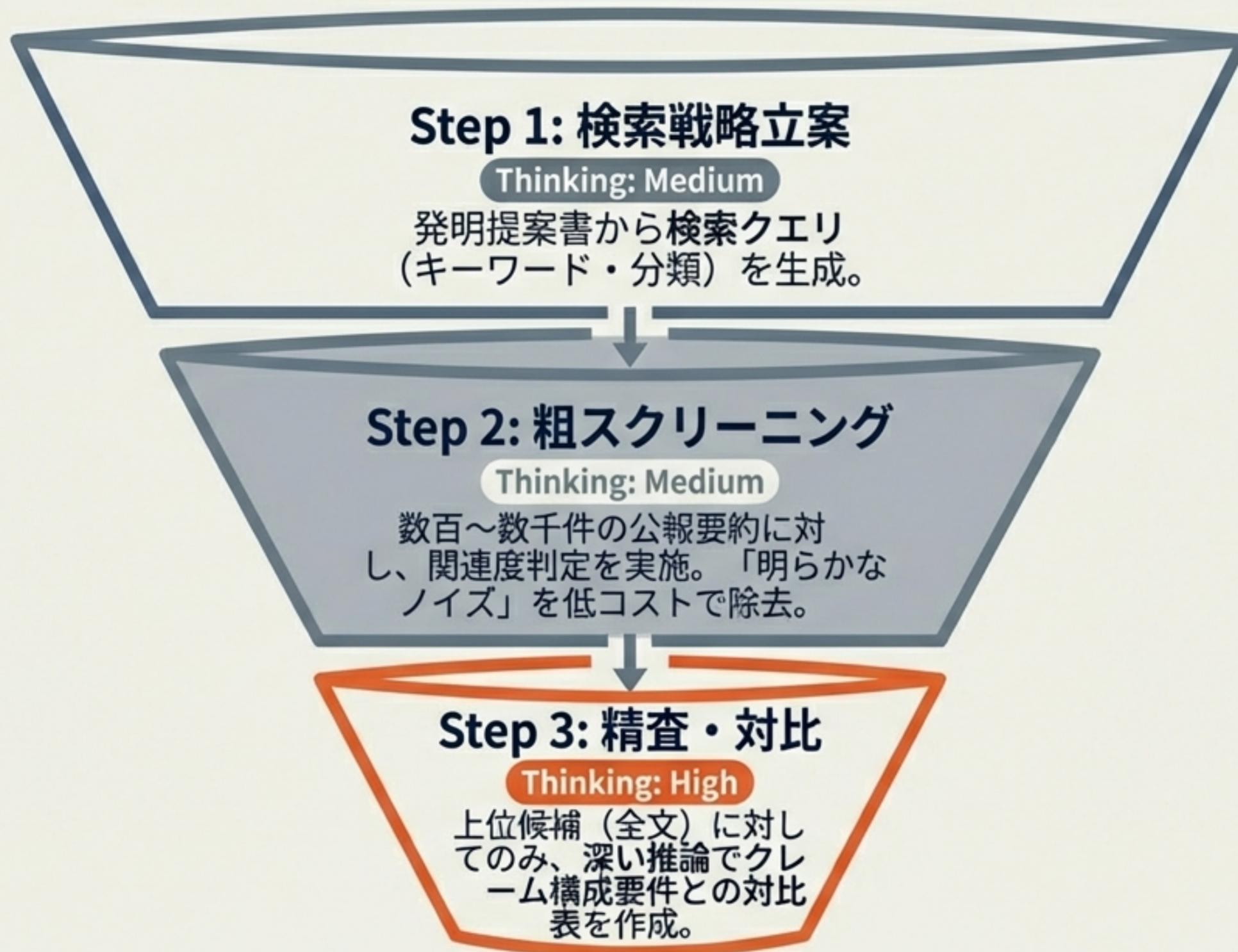
3.1: 33.5%

+15.1pt

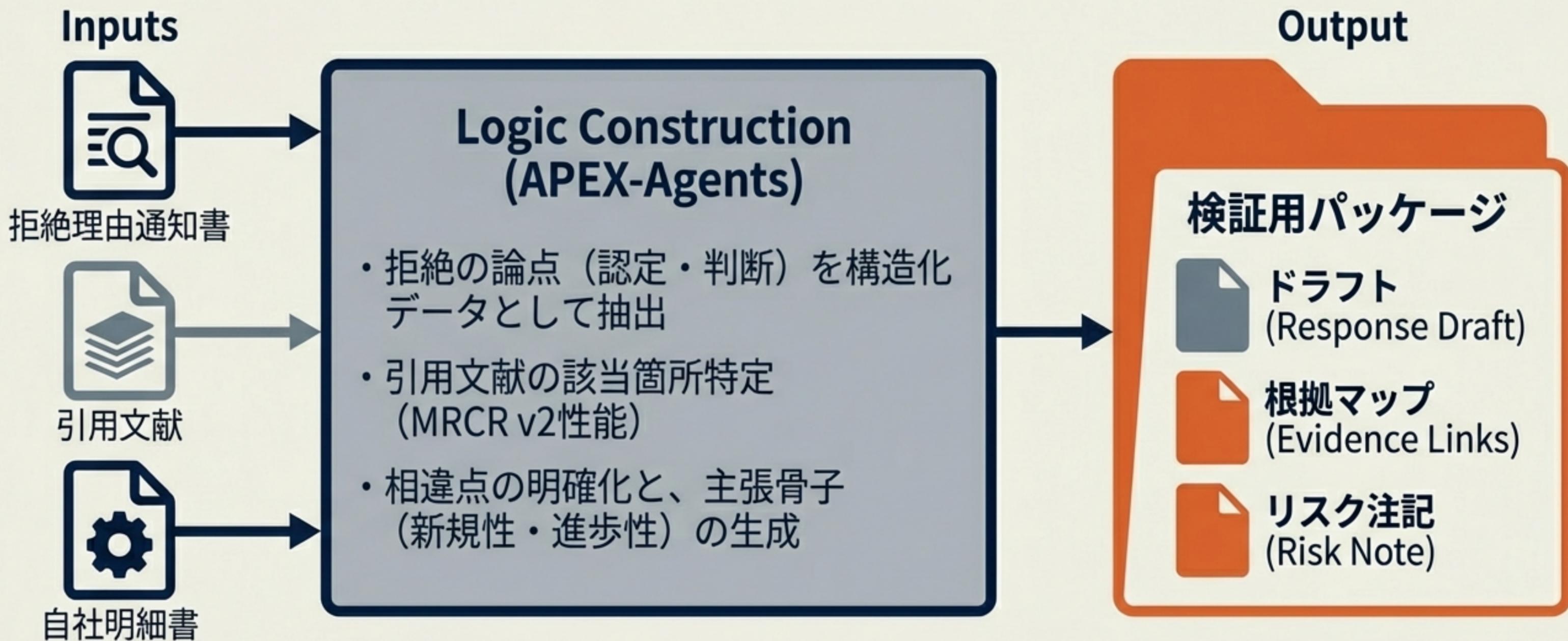
OA応答やFTO分析など、完了まで時間がかかるタスクを「やり切る」力。

これらは単なる数値ではなく、「人間が介入して修正する頻度が減る」ことを示唆している。

先行技術調査：スクリーニングと精査の「段階的自動化」



OA応答・FTO：複雑な論理構築と根拠検証のパッケージ化



最終的な法的判断は人間が行うが、ドラフト作成と整合性チェックの手間を大幅に削減。

発明発掘と契約レビュー：社内データ活用と構造化

発明発掘 (Invention Mining)



課題：膨大な実験ノートや議事録から、特許性のある「種」を見つけるのは工数がかかる。

3.1の解：**Thinking Level: Medium** で社内資料を網羅的にスキャン。図表理解を含むマルチモーダル能力で、技術的特徴を抽出・構造化。

契約レビュー (Contract Review)

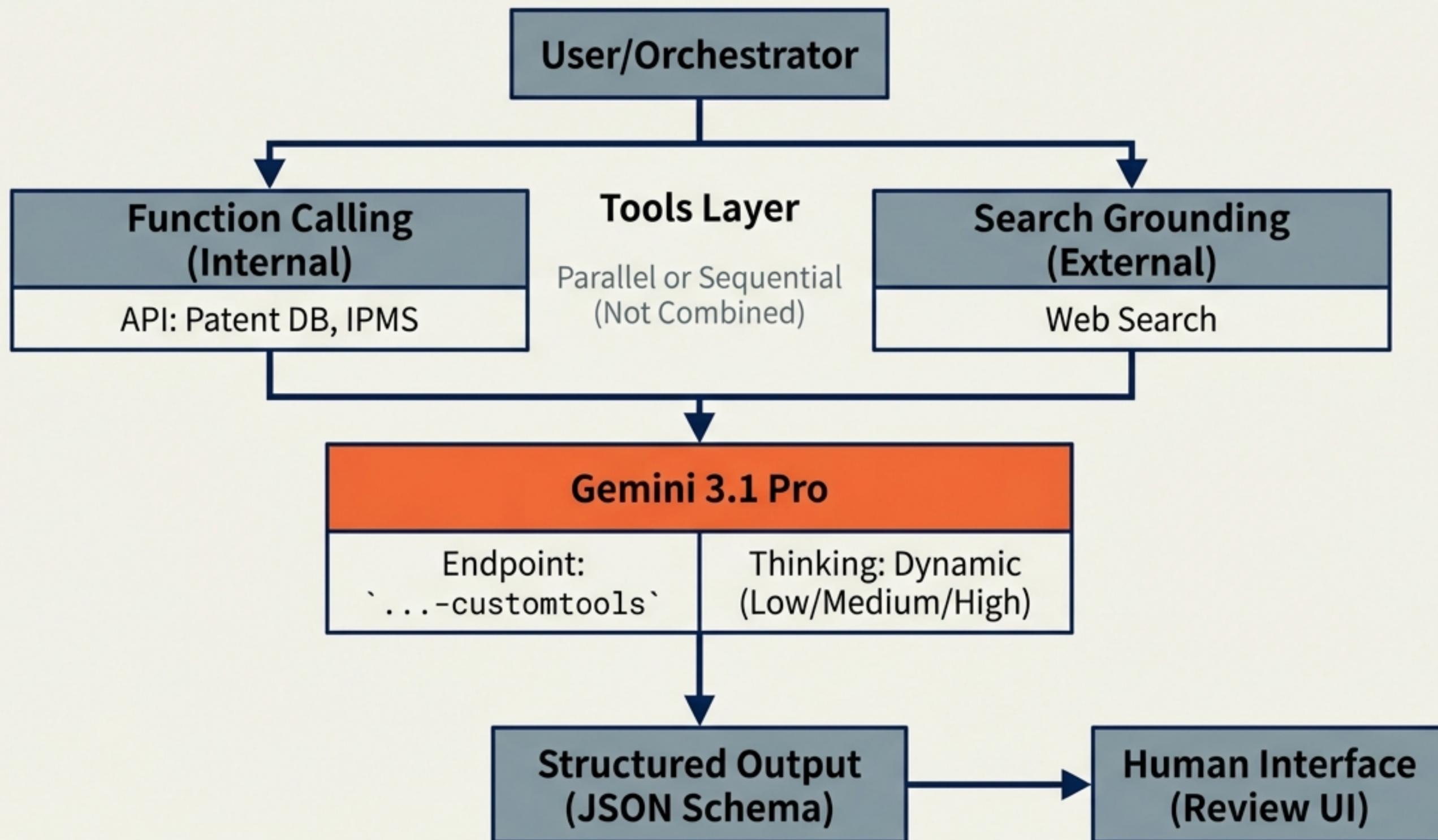


課題：秘匿性が高く、外部モデルへのデータ送信が懸念される。

3.1の解：**ZDR (Zero Data Retention)** と企業統制機能。条項抽出→リスク判定→修正案の「定型+例外」処理を、セキュアな環境で自動化。

共通点：どちらも「構造化出力 (JSON)」により、システム (IPMS/契約DB) への登録までを自動化。

推奨アーキテクチャ：「人とAIの協働」を前提とした設計



構造化出力の実装例：検証可能な「クレームチャート」

```
{  
  "claim_id": "Claim 1",  
  "limitations": [  
    {  
      "text": "部材Aと部材Bの接合...",  
      "evidence": "引例1 段落[0025]",  
      "support_level": "explicit"  
    }  
  ],  
  "overall_risk": "High"  
}
```

Claim Element	Evidence	Support	Risk
部材Aと部材Bの接合...	引例1 段落[0025]	Explicit	High

IPMSに直接インポート可能。「根拠箇所（段落番号）」がフィールドとして定義されているため、人間による事後検証（監査）が容易。幻覚リスクを運用でカバーできる。

組織と役割の変化：「作業者」から「統制者」へ

パラリーガル/サーチャー

Before: 検索・抽出作業



After: AI成果物の監査、
プロンプト調整

弁理士/知財担当

Before: ゼロからのドラ
フト作成



After: 権利化方針の決定、
経営層へのリスク説明

KPIの進化

Old KPI:
作成件数・時間

New KPI: リスク発
見率、意思決定ス
ピード、リスクマ
トリクスの更新頻
度

3.1 Proの機能（APEX-Agents等）は、「案件を完遂させる」方向への進化であり、人の役割をより高度な判断に集中させる。

ガバナンスとセキュリティ：企業導入の必須条件



- 学習制限:** 顧客データはモデルの学習・再訓練には使用されない（規約で明記）。
- ZDR (Zero Data Retention):** プロンプト・応答をログとして残さない設定が可能。
- 検索グラウンディングの注意:** 30日間のデータ保持があるため、未公開の極秘発明には使用しない。
- ログ管理:** プロジェクト単位でのVPC/IAM管理を徹底し、共有ミスを防ぐ。

 技術的なセキュリティ設定と、社内運用ルール（どのデータを投げて良いか）の策定をセットで行う。

導入ロードマップ：統制から始まり、価値検証へ

Weeks 1-12

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
統制設計：データ分類、ZDR方針決定、ログ監視設計											
Phase 2: 優先パイロット											
<ul style="list-style-type: none">• 契約レビュー（低リスク）• 発明抽出（Thinking Medium検証）											
								Phase 3: 本格検証			
								<ul style="list-style-type: none">• 先行技術調査（DB連携）• OA応答支援（複雑論理）			

⚠ Note: プレビュー版は予告なく廃止・変更される可能性があるため、既存業務システムの「完全置換」ではなく「並走（アドバイザー）」として開始する。

前提と限界：AIは「責任」を負わない



幻覚 (Hallucinations):

ゼロにはならない。
「根拠の提示」と「人の
検証」がセットで必須。



知識カットオフ

(2025年1月): 最新の法
法改正や審査基準は検索
で補う必要がある。



法的責任:

最終的な侵害判断や特許
許性判断は、必ず有資格
者・責任者が行う。

Gemini 3.1 Proは、知財業務を「手作業の積み上げ」から「AIオーケストレーションの監督」へと進化させる強力なツールである。まずは「安全な領域」からのパイロット活用を推奨する。